

対人関係の「修復」の研究は有用か

増田匡裕 (広島国際大学人間環境学部)

本稿のねらいは、これまでの対人関係研究において殆ど議論されて来なかった「修復(Repair)」という概念の有用性について検討するものである。これまでの対人関係研究において、「修復」という概念は、Duck(1984a)で実験的に議論されて以来、具体的な研究対象とされて来なかった。本稿は、これが「修復」という概念の定義の難しさにあると指摘し、具体的にどのような「修復」があるのか、「関係の修復」と「人間の修復」について、「修復」の対象を詳らかにすることで、これまでの関連研究の知見を総合することを試みる。この分析から明らかになるのは、「修復」が社会的な価値と不可分な概念であり、それは同時に研究者自身の研究姿勢をも問うものであるという点である。結論として、「修復」という概念は、理論化するには困難であるものの、メタ理論としての機能が期待できると考えられる。

キーワード：対人関係の修復、対人関係の維持、対人関係の崩壊、対人関係の再定義、立ち直り

「修復(Repair)」という概念は、一見対人関係における何気ない普通の行為を指し示すように思われる。我々の日常生活において、対人関係に何らかの問題が生じた後に「仲直り」を試みるのは普通のことである。しかしながら、現実には「仲直り」することが容易でないこと以上に、何をもち「仲直り」とするのか定義することは困難である。

この定義の難しさが対人関係の「修復」に関する研究の障害となってきたことは疑いない。「修復」という概念自体は、対人関係研究の古典的集大成たるDuck(1~5巻担当)とGilmour(1~3巻担当)の編集によるPersonal Relationships全5巻の最終巻Repairing Personal Relationshipsにおいて既に議論されている(Duck, 1984a)。しかしこの第5巻で触れられた分野の研究は、他の巻の分野、すなわち関係の発達(第2巻)、障害(第3巻)及び崩壊(第4巻)の研究の今日における発展と比べると、明らかに停滞しており、忘れ去られているに等しい。その理由として考えられるのが「修復」の定義の問題である。

Duck(1984b)で議論された「修復」とは、主に対人関係において傷ついた個人を助けるというものであった。換言すれば、対人関係の修復とは「関係者の修復」であり「関係の修復」ではなかったのである。「関係者の修復」とは、つまるところ「対人関係の関係者の利益を守る」ことに他ならない。従って「関係の修復」は、その「対人関係」が「関係者の利益」となり得るか否かの判断次第で、その対人関係を維持することにもなり、またその関係を平和裡に終結させることを意味することになる。対人関係の「維持」と「終結」という相反する2つの過程を「修復」という1つの言葉で総括することは、斬新ではあったものの個々の研究に適用するには実用的ではなかった。実際の研究では「維持」か「終結」に焦点を絞れば良い訳であり、敢えて「修復」という曖昧な概念を用いる必要はなかったのである。特に1980年代は、多くの対人関係研究が社会交換理論の影響を受けており(e.g. Burgess & Huston, 1979)、対人関係の発達過程の主要な論点は、「関係に残るか去るか」という選択の決定因であった。従って1980年代の対人関係崩壊過程のモデルは、フローチャート形式で表現されていることが多い(e.g. Baxter, 1984; Duck, 1982a)。故に、対人関係を修復するのはその関係を維持せねばならないから、つまりその関係には留まるだけの価値があるからであるという説明で十分であった(Attridge, 1994)。

しかし5巻本発行から十数年を経た対人関係研究の発展により、対人関係の「維持」と「終

結」はフローチャートの二者択一の選択肢同士ではないという主張がなされ始めている。例えばコミュニケーション学では、そもそも対人関係とは相反する「求心力」と「遠心力」がせめぎ合う場所であり、対人相互過程は常にパートナー同士が不即不離の力動的な状態のまま不断に関わり合うことで続けられるという「対人関係の弁証法(Relational Dialectics)」が提唱されている(Baxter & Montgomery, 1996; Conville, 1991)。つまり対人関係においては、それを終結させたまま維持するという矛盾が可能なのである。一方、臨床心理学や家族心理学の方でも、全く別のアプローチで「終結」と「維持」の共存を図る試みがなされている。例えばAhrns(1994)はその著書The Good Divorceで、両親の離婚によって家族が分断されることがないように、元夫婦が新しい対人関係を築き上げるための方略を提唱している。両者のアプローチに共通するのは、対人関係の理論をより現実に近付けることである。「出会い」から相互作用が単調に増加し、やがて単調に減少して「別れ」に至るという古典的な一次元モデルでは、現実の対人関係のあり方を十分説明することができないのである。

このような対人関係研究の今日の発展を踏まえて、本稿ではこの発展から取り残された概念である「修復」について再考する。本稿では特に、「修復」の定義に必要な諸要素を検討し、「修復」という概念を設ける意義について議論する。

対人関係の「修復」とは何か

対人関係の修復の研究が困難であるのは、その対象が掴みどころのないものだからである。具体的には次の3つの問題が挙げられる。第一に問題となるのは「修復された状態とはどのような状態か」ということである。次に「具体的に何を修復するのか」がわかりにくい。Duck(1984c)の対人関係の崩壊と修復のモデルが明らかにするように、崩壊過程のある時点での修復は「対人関係の修復」であり、別の時点での修復は「人間の修復」である。特に定量的な変数を分析する研究者にとっては、何を従属変数と取るべきかが難しい。「対人関係の修復」であれば「満足度」や「関与度」などの相互作用に関する変数が、「人間の修復」であれば「鬱状態」などの個人の心理的健康状態に関する変数が考えられる。しかし後に述べるように、これらの定量的変数の測定を試みる場合、修復という概念は必ずしも必要ではなくなる。

修復された状態とはどのような状態か

対人関係の修復の研究の困難さは、修復という行為の目的が明らかでないことに由来する。問題の生じた対人関係をどうするかという点に絞ると、一言で「修復」と言っても、大きく分けて「関係の維持」と「関係の解消」の相反する2通りの目的があるからである。Duck(1984b)のモデルに拠れば、関係解消を決意するまでの修復は「関係の維持」であり、それ以降の修復は「関係の解消」である。つまり、関係解消を決意するまでは、関係解消を防ぐための行動としてのコミュニケーションや相手を理解し直すための認知過程を指して修復と呼ぶのに対し、一旦関係解消過程に踏み込んだ後は、如何にして関係解消に伴う心理的及び社会的負担を軽減するかという点に、修復の主眼が移ってしまうのである。これは後に述べるように、修復の最終的な目的が個人の心理的健康と社会的立場を守ることにあるためである。

この点を踏まえた上で、修復の目的とする結果として次の3つの状態を考えることが出来る。まず第一に「関係の安定化」が挙げられる。これは関係の修復が関係の維持を目的とするという考えに基づいている(Duck, 1988)。この修復について「修復」という術語を用いた研究は少ない一方、「維持」という術語によって多数の研究がなされている(Canary & Stafford, 1994; Dindia & Canary, 1993; Harvey & Wenzel, 2001)。対人関係の維持の研究の中でも、特に修

復の概念に近いものとしては、葛藤の解決に関する諸研究が挙げられる(Cahn, 1992; Canary, Cupach, & Messman, 1995)。

一方、個人を救済するという立場に立てば、修復の結果として望ましいのは「関係悪化による影響の緩和」という状態である。この立場から見れば、修復は次の3つのうちのどれかを目的とするものとなる。第一に、修復は関係悪化によって心理的に傷ついた個人を回復させることを目的とする。第二に、修復は関係悪化によってうけた社会的損失を回復させる。これらの2点は、悪化した関係が個人にとって価値のある関係であることを前提としている。逆に、悪化した関係自体が個人にとって有害である場合がある。ドメスティック・ヴァイオレンスに代表される身体的、性的、または精神的な暴力を受ける対人関係である(Cahn & Lloyd, 1996)。このような暴力的な対人関係においては、場合によっては虐げられた個人の救済のために、継続している対人関係を平和裡に終結させることが必要となる。「平和裡に」という表現は、このような関係を単純に終結させるだけでは、傷ついた個人を精神的に守ることはできないという含みである。単純に災いを取り除くだけでは、被害者の心理的健康は回復されない。有害な対人関係に蝕まれた個人を救済するためには、関係終結後の新しい生活への適応に対する社会的な支援が必要である。この適応への努力と社会的支援の要請こそ、Duck(1984b)の関係終結と修復のモデルで、関係維持が不可能になった対人関係の修復に不可欠なものである。

第三の修復は、「関係の安定化」と「関係悪化による影響の緩和」の両立を必要とする修復、つまり一旦終結した対人関係の「再開」である。具体的には、離婚した元夫婦間の対人関係が挙げられる。これは想像上の産物ではなく、非常に現実的なものである。特に個人の意志と家族の価値の両方を重んじる合衆国において、離婚後の家族関係は切実な問題である。何故なら、離婚は個人の自由意志の結果として尊重されるべきであるが、それによって家族の絆が破壊されることは社会の価値に反するゆゆしき事態である。この矛盾を解決するために、合衆国の家族関係の研究者たちは、家族を核家族から拡張し、婚姻関係や血縁関係にとらわれない緩やかな集合体として見直すことを提唱している(e.g. Ahrons, 1994; Ganong & Coleman, 1994)。特にAhrons(1994)は、離婚によって核家族の「核」が2つに分裂しただけなのだから、「2核家族(bineuclear family)」と呼び直して、元夫婦は子どもの養育を共同して行うパートナーとして関係を続けられれば良いと主張し、5種類の形式による関係の再構築を提案している。元夫婦間の関係については、子育てを目的とするものだけではなく、単純に友人関係として再開する例も報告されている(e.g. Conville, 1988; Masheter, 1991, 1997)。また元夫婦間だけでなく、未婚の恋愛関係においても、元恋人同士の友人関係が現実に存在することが報告されている(MacLennan, 1998; Masuda, 2000/in-press; Metts, Cupach, & Bejlovec, 1989)。

以上のように、悪化した対人関係には、「安定化」、「影響の緩和」、そして「再開」という3種類の修復が可能である。ただ興味深いことに、これまでの対人関係研究の分野では、「絶交」した後に再開された友人関係や「勘当」の後に再開された親子関係など、同じ形式の対人関係が修復された過程に関する研究は発表されていない。詳しく言えば、これまでの研究では、「一旦関係が終了した」ことがある友人関係や家族関係は、研究者の定義上では終結したものとして見なされないのである。つまり、同じ形式の対人関係の場合、それを再開することは「再定義」ではなく「維持」と見なされるのである。あくまでも修復を関係の維持、即ち「安定化」と見なす限り、一旦終結する事態の発生があっても、これは継続された関係の危機と見なされるのである。従って、これまで「関係終結後に『再開』された関係」として認められてきたのは、上に挙げた恋愛関係が友人関係に再定義された関係の研究や、"enemysip"すなわち敵対関係(Wiseman & Duck, 1995)へと変化した関係の研究に限られている。

以上の議論を換言すれば、「修復」という概念の定義の難しさは、我々研究者が従来当たり前のように入ってきた他の概念の定義の曖昧さに由来するとも言うことができよう。Dindia & Canary(1993)が投げ掛けた「そもそも対人関係の維持とは何か、どういう状態のことか、どうすれば良いのか」という疑問は、対人関係発達過程の他の概念にも当てはまる。「対人関係がいつどのように終結するのか、またどのような状態を終結と言い表すのか」ということも、自明ではあり得ないのである。恋愛関係の再定義過程が、それに先立つ関係の終結を比較的明確に示しているのは、恋愛関係がDuck(1994)のいう「宣言された(declared)」対人相互過程、すなわちパートナー同士がその関係を有意義なものとして理解するための明確な表出行為を伴う対人関係であるためであると考えられる。恋愛関係は特にその終結過程において、適切なコミュニケーションを必要とするため(Banks, Altendorf, Greene & Cody, 1987; Battaglia et al, 1998; Wilmot, Carbaugh, & Baxter, 1985)、その終結が明示され易く、それ故研究者の目にも留まりやすい。一方、友人関係や家族関係に「気まずい雰囲気」や「緊張感」はあっても、「絶交」や「勘当」などが明確に表示されることは稀である。友人関係や家族関係が再開されても、断絶期間を終結と見なされにくいのはそのためである。特に家族については、血縁がある限りは何らかの形で家族であるという暗黙の諒解も影響している。

何を修復するのか

何を修復するのかという問題を換言すれば、悪化した対人関係の何が修復されて何が修復されないか、という選択の問題であると言える。いつの時点で「関係」を選び、いつの時点で「個人」を選ぶか、というのがDuck(1984b)による関係終結と修復の5段階モデルであった。だがむしろ後にDuck(2000)自身が述べたように、対人関係のある部分は修復されないが、別の部分は修復されることがある、と言い換えられるべきである。但し言うまでもなく、修復されるべき対象の中に「個人」が入っていないとてならない。「修復」という言葉は社会的な望ましさを含意する。従って、一方のパートナーが暴力的に虐げられる関係は、「個人」の犠牲の元に成立されているため、「修復」されるべきではない(Cahn & Lloyd, 1986)。この社会的な望ましさについては後に議論することとし、この節では修復されるべき対象について論じる。

関係の修復

(1) 定性的なもの 対人関係において修復される定性的ものとしてまず挙げられるのが、対人関係の名称、つまりある特定の名称で表される対人関係それ自体である。しかし繰り返すように、一旦終結して同じ名称で復活した対人関係の研究はなく、新たな名称で再定義された関係か、終結したとは見なされずに関係の維持と見なされた研究に限られる。

この理由は、対人関係の名称の定義の問題を考えると明らかである。ある名称で呼び慣わされる対人関係が一旦終結した後に復活するケース、即ちパートナー同士の肩書きとでもいうべき名称が当人たちの自由裁量で失効させられた後復活させられるケースが少ないからである。離婚した夫婦の復縁であれば、法的手続きを伴うため(つまり公的に「宣言されて」いるため)、夫婦関係の定性的な修復はわかりやすい。しかし夫婦関係以外の対人関係の「離縁」と「復縁」に伴う、対人関係を表す名称の失効と復活は明確にされていない。心理学を中心とするこれまでの研究では、恋愛関係にしる、友人関係にしる、私的な対人関係は多数の要素からなる構成物として定義され、その発達過程は量的な指標で測定されてきた。そのため、単なる顔見知りと友人関係の質的な境界線というものは明確に定義されず、両者は連続した尺度上の相対的な違いと見なされてきた。

一方、公的な対人関係、例えば職場の対人関係などは、どんなに悪化しようとも公的な立場が続く限りはその関係を維持して行かねばならないし、逆にどんなに良好であっても共に所属する組織の理由で解消させられることになるので、パートナー同士の対人関係の名称の失効と復活は問題にならない。異動が無い限りどんなに関係が悪化しても「同僚」でなくてはならないので、「関係の安定」としての修復のみが重要視される。但し、「先輩・後輩」や「師匠・弟子」など、元来公的な関係に由来する「準公的」とでもいうべき私的な関係については検討を要するが、このような対人関係の発達過程についての研究は稀である。

同じ種類の対人関係の復活という修復が研究されていないのは、研究者側の事情にも遠因がある。対人関係研究の発展に寄与してきた社会心理学は、仮説検証による実証研究を基本的なパラダイムとしてきた。一方、ある特定の種類の対人関係の定義の研究は、多かれ少なかれ文化人類学的な調査及び分析手法を取り入れた記述的な研究である。従って、定義の研究は伝統的な社会心理学者にとって生産的ではない。例えば、恋愛の定義で現在最も優勢なのはLee(1974)の「色理論」とSternberg(1986)の「三角理論」であるが、恋愛研究の先駆者Rubin(1971)を含め、彼らの理論で定義された恋愛の要素や原型が、本来西洋文学などのテキストの中から抽出された「文化人類学的なもの」であったことは、屢々見落とされている。しかし実証主義に則った「正統的」な社会心理学的研究を出版するためには、これらの理論に対抗するよりも、これらに基づいて立てた仮説を検証する方を選ばざるを得ない。更に研究者側には、研究への参加者の募集に際し、人口に膾炙した一般的な対人関係の名称に頼らざるを得ないという事情もある。また定量的分析を行う大多数の研究者は、ある程度の人数の参加者を短期間に募らねばならないという制約もある。従って、対人関係の名称が変更されたり復活したりという変則的なケースに相当する参加者を捜すよりも、あるひとつの名称の許で、「普通に」発達して解消される「普通の」対人関係を研究する方がリスクが少ないのである。従って、同じ名称のまま復活した対人関係も、一旦経験した終結を単に関係の危機と見なすことによって、研究対象として扱いやすくなる。

現在のところ、対人関係自体の定性的な修復に関して最もデータが多いのは、恋愛関係の再定義による友人関係の研究である。これは関係が質的に変化したことが前提となっているためである。このような友人関係は、恋愛関係の「復縁」として誤解されることが多いが故に(Masuda, 2000/in-press; Werking, 1997)、過去の関係が一旦終結したことが強調されていなければその存在を社会的に認知されにくい。よってこれらの関係のパートナーたちは、時間の非可逆性と、終結前の恋愛関係と修復後の友人関係の質的な差異を強調する(MacLennan, 1998; Masuda, 2000/in-press)。しかし、元恋人同士の友人関係の場合、過去の恋愛関係の終結によって損なわれたものを、友人関係を造り上げることによって取り戻したということにはならない。Schneider & Kenny (2000)は、過去に異性愛の恋愛関係であった友人関係は、異性愛の関係にならなかった異性の友人関係に比べて遥かに複雑であるというデータを示している。元恋人同士による友人同士は、普通の異性の友人同士に比べて、自分たちの友人関係により多くの利点と欠点の両方を見出しているのである。つまり、関係の修復を含む長い過程で相互の長所と短所の両方を知ることによって、「清濁併せ飲む」かたちで友人関係を築き上げていると言える。Erbert & Duck(1997)が主張するように、対人関係における満足感というものは、単に相手に対する肯定的評価だけに基づくのではなく、相手に対する否定的評価の自覚を踏まえた上で、相手に対する両義的評価のバランスを取ることによって得られるのである。従って、対人関係の修復は、少なくとも「蟠りを水に流す」といった単純なものではない。むしろ、否定的評価を上回るに十分な、関係を再開する意義を作り出す過程であると言える。

(2) **定量的なもの** 対人関係研究の分野では、対人関係の発達過程を表現する指標として様々な変数が採用されている。しかし大部分の研究が経時的・縦断的なものでないため、関係悪化の前、関係悪化の後、関係修復後の3つの時点における同じ定量的変数の値を測定した研究について耳にすることはない。定量的な研究はある程度の大きさの標本集団を必要とするため、何人の関係が悪化した後に修復されるか見当もつかないようでは、研究対象として選択されにくい。

その代わりに経時的研究において採用されるのは、回顧的手法による分析である。代表的な回顧的測定法として知られているのは、Huston, Surra, Fitzgerald & Cate(1981)によるRIT(Retrospective Interview Technique)である。これは本来、対人関係がある目標に向かってどの時点でどの程度到達できていたかについて、到達度100%乃至それに準ずる状態である現在の視点で、到達度0%乃至任意の開始時点から現在までの到達度の変遷を、任意の時間単位を横軸、到達度を縦軸にとって折れ線グラフを描くことで定量的に表現する手法である。

このRITを効果的に用いた修復の研究が、Graham(1997)による離婚を克服した家族の研究である。この研究で用いられた変数は、離婚によって一旦0%まで低下したと仮定された「家族としての関与度」である。Grahamが分析したのは、家族関係の修復過程の変遷とその変遷に影響を与えた出来事、すなわちターニング・ポイント(Baxter & Bullis, 1986)である。このようなRITによるターニング・ポイントの分析の前提は、対人関係の発達過程を一次的に表す変数の存在である。

しかしこのGraham(1997)の研究における変数は、離婚後という限定された範囲内でのみ一次的である。離婚前と離婚後では、同じ構成員による家族でも、家族の意味が明らかに異なっており、離婚後の関与度を用いて離婚前の家族の関与度を測定することはできない。理論的には、RITは対人関係の発達には目標があることが前提であるから、離婚後の家族関係の再構築という目標は離婚前の過程には無意味である。この意味で、測定された「家族の関与度」が、嘗て失われたものと同一であるか疑わしい。家族の修復とはいうものの、その実質的な内容は、同じ家族構成で、新たな家族を最初から造り上げる過程に過ぎない。そうであれば、「修復」という術語を採用するまでもなく、単純に、ある特定対人関係の「発達過程」と称すれば良いのである。

このように対人関係の修復が質的な変化を伴っている場合、一旦損なわれて回復された一次的な定量的変数を同定することは困難である。従って、対人関係を構成する要素のうち、関係悪化によって損なわれなかった変数について検討した研究もある。例えば、Metts, Cupach & Bejlovec(1986)の研究は、関係終結後の恋人同士が再び友人同士として関係を再開するための要因を分析したものである。この研究は、交際相手との好意的な相互作用の全体的な質を数値化したものを定量的変数としており、恋愛関係を始める前に友人関係であった恋人同士であれば、より肯定的な態度で友人関係を再開することができるという結果を示唆している。しかしこの研究は肯定的態度という一般的な指標に従属変数としているため、全体的な対人相互作用の質というものがどのように変化したかについて不明確である。皮肉な見方をすれば、これらの友人たちにとって本来の友人関係が正しい関係の在り方であって、恋愛関係としての期間は誤りであったという解釈も成り立つ。だとすれば、逆説的だが彼らの関係にとっては、「恋愛関係の終結」こそが「関係の修復」であったとも言える。

人間の修復 対人関係自体の修復を定義し、変数を取ることが困難であるのに対し、対人関係のパートナー個人を心理的または社会的に修復することについての研究は比較的容易である。これは対人関係の終結、特に離婚や死別による配偶者との離別が心理的ストレスをもたらすこ

とが知られているからである(Notarius & Pellegrini, 1984)。対人関係におけるストレスに起因する鬱状態などの心理的健康状態は心理学者や社会学者が得意とする分野であり、家族心理学や健康の社会心理学といった分野で多くの研究が発表されている。また離婚によって精神的健康を損なわれるだけでなく、元配偶者と共有していた社会的ネットワークを失うことによる孤立が離婚者のストレスを倍加させる(Johnson, 1982; Milardo, 1987)。従って、人間を社会的に孤立化させないための社会的援助を行うことも「人間の修復」ということができる(Duck, 1984b)。

「人間の修復」について今後更なる検討を要する課題は、関係が拗れた相手に対する認知である。これまで専ら宗教心理学や臨床心理学で扱われてきた「赦し(forgiveness)」の認知過程についての社会心理学的考察はまだ始まったばかりである(McCullough, Pargament & Thoresen, 2000)。赦しは関係解消後の心理的健康状態だけでなく、悪化した関係の修復にも極めて重要である。それは相手を許すことによって、相手のことを考え続けることをやめることができるからである。ここで誤解してはならないのは、相手のことを考えることは必ずしも良いことばかりでないという点である。英語で言う"thinking of"であれば問題ないが、これが黙々とくよくよと悩む"rumination"であれば、それは確実に対人関係を蝕んでしまう。対人関係における葛藤状態の解決の研究の多くが、最悪の解決法として相手や問題を忌避すること(avoidance)を挙げているのはそのためである(Canary & Cupuch, 1988; Canary & Spitzberg, 1987, 1989)。同様に、一方的な態度で相手を黙らせてしまうことも関係の崩壊に繋がる。McCullough, Rachel, Sandage, Worthington, Brown, & Hight(1998)によれば、親しい関係の相手に酷い仕打ちをされた際に黙々と考え込むことは、相手に対する復讐心を掻き立てる結果になる。相手の仕打ちに対して考え込んでしまうのは、相手に対して否定的な態度を持っているからでは決してなく、むしろ本来相手に好意を持っているためである。考え込む方の人物は、その相手から赦しを求められるまで相手の行為について考え込んでしまう。そして赦しが必要でなくなった時には手遅れである。この認知モデルによれば、親しい関係が拗れるのは、相手が憎いからではなく、本来相手に対して抱いていた好意が仇となった結果なのである。また復讐心を抱かないまでも、考え込むことで相手との関係の価値に関する認知構造が変化し、関係の解消を決断するに至る(Cloven & Roloff, 1991)。

一方、関係解消後の相手に対する赦しについては、研究者の評価は割れている。対人関係研究の分野では伝統的に、肯定的であろうと否定的であろうと、元パートナーについて考えることを不健康であるとしてきた(Berman, 1985, 1988a, 1988b; Lussier & Alain, 1986)。これは、関係解消後の相手に対する認知や態度の研究が、専ら恋愛関係を対象とするものに限られてきたためである。離婚した人を対象とした研究の多くは、元配偶者について考えることを「取り憑かれたように思い続けること」即ち"preoccupation"と称して、相手のことを忘れさせることがその人物の為になることであるとしてきた。特に、過去の相手に対して好意を抱き続けることは未練と見なされ、立ち直っていない証拠とされてきた。

しかし最近では、過去の相手について考え続けることが即不健康であるという考えに異論を唱える研究者も表れている。対象喪失に伴う意味生成過程を重視するHarvey(1995, 1998)は、アイデンティティの再構築による適応のために、喪失について繰り返し考え、悲嘆することは必須の過程であると主張している。つまり、辛い記憶や甘い記憶を無理に取り除くのではなく、時間を掛けて自己の一部として安定させるべきなのである。一方、元配偶者間の友人関係を研究するMasheter(1991, 1997)は、元配偶者に対する好意と"preoccupation"とを分離することに成功し、このような友人関係に対する否定的な見方を覆している。両者に共通するのは、対人

関係の終結は決して研究対象としての「対人関係」の消滅を意味しないという主張である。終結した対人関係は「始めから無かったこと」にはならないのである。つまり、関係解消後のパートナー個人の修復は、単純に対人関係による悪影響を除去するのではなく、それを新たな自己の一部、もしくは新たに再構成された関係の一部として、何らかの形で意義のあるものに変えるという認知過程であると言えよう。

修復する必要があるのか

これまでの議論は「修復」の概念の多様さを示すものであったが、同時にあるひとつの共通点を指摘するものでもあった。修復という現象は、修復されたものに価値が認められて初めて修復と見なされるのである。故に、研究者が修復という現象に対して完全に中立の立場で臨むことは不可能である。この点において、修復という概念は、対人関係の研究者の科学観を問うものであると言える。研究者自身が文化的、社会的な価値観の影響を全く受けずに客観的な研究ができると信じる研究者には、修復という概念は全く意味を為さない。

一見多様にみえる研究も、個人の心理的健康状態に価値を認めるという点では意見が一致している。問題は、損なわれた対人関係に価値を認めるか否かである。先に述べたように、離婚後の元夫婦の関係の研究は、「夫婦関係」を「親同士の関係」と見なすか「親密な個人の二者関係」と見なすかによって、元夫婦の関係の維持の望ましさについて全く異なった評価をしている。子どもがいれば、その子どもに価値が認められるために元夫婦の関係は望ましいが、いなければその必要はないという考えが主流である。確かに、実際のデータでも子どものいない元夫婦の交際は少ないとされている(Ahrons & Wallisch, 1987; Ambert, 1988, 1989)。しかしこの「子は鎚」という説明は、元夫婦同士の二者関係自体を肯定的に評価したものとはならない。あくまでも関係を維持することで守られる家族に価値を認めるものであり、二者関係の修復はその価値のための手段に他ならない。

対人関係を何らかの価値を保持するための手段と考えることは、元来対人関係研究の伝統において主流であった。Kelley以来の社会交換理論の影響を多かれ少なかれ受ければ、自己の幸福追求に有利な対人関係は維持され、そうでなければ解消されるという理論的枠組みを持つことになる。しかしこの社会交換理論的発想の最大の問題は、対人関係の修復や改善よりも、関係に留まるか否かの決定要因に研究の主眼があった点である。社会交換理論には、人間は本来より有利な対人関係を選択したいと考えているという前提があるため、解消する際の障害が多ければ多い程対人関係は維持され易い、言い換えれば、対人関係は元来崩壊する性質を持っているという発想に至る(Attridge, 1994)。従って、対人関係を維持するのは、その価値を他の関係から得られないからだという説明が成り立つ。「子は鎚」の発想は、この社会交換理論的枠組みと表裏一体の関係にある。伝統的な親子関係を軸とした家族関係は選択するものではない。一方、配偶者は選択するものである。つまりAhrons(1994)の提唱する「2核家族」とは、代替不可能な「親子関係」を残したまま、代替可能な「恋愛関係」を解消したもののなのである。

ここで再び、研究者自身の対人関係に対する価値観が問題となる。Ahrons(1994)の主張の前提となっている「親子関係」が代替不可能性は、あくまでも合衆国社会において社会的に構成された概念であり、彼女が「親子関係」の継続を強調するのは、それが彼女の理論を受け入れられ易くする手段であるからか、もしくは彼女がそれ以外の理由で元夫婦が関係を保つことの意義を認めていないからである。つまり彼女の価値観では、家族は社会的に意義があるが、恋愛関係は意義がないということである。

対人関係の修復に関して、研究者に影響を及ぼしているもうひとつの価値観は、親しい対人

関係における否定的側面の排除である。例えば元恋人に対する好意を「不健全」と見なす研究の根底には、関係解消によって元恋人たちは傷ついている筈であるという仮定がある。勿論、それは根拠のない想像ではない。しかし、問題なのは、否定的な側面が少しでもあれば、その対人関係を排除するという研究者の姿勢である。欠点のない人間が存在しないように、欠点のない対人関係も存在しない。先に述べたように、対人関係を満足することは、相手の長所と短所、関係の良い面と悪い面をそのまま受け入れることなのである(Erbert & Duck, 1997)。対人関係には、本質的に否定的側面が不可分なものとして存在する以上、過去に問題の発生した対人関係をそのまま捨ててしまうことは、むしろ現実的ではないと言える。対人関係の研究者の大多数は、「親しい」関係に興味がある。しかし「親しさ」を研究することは必ずしも「美しさ」や「純粋さ」のみを追究することではないのだ。研究者が留意しなければならないのは、「親しい関係」や「良い関係」を「無疵な関係」と混同しがちな幻想である。

無論、否定的側面の容認には研究者自身の対人関係に対する価値観及び人間観の再検討が必須である。そのためには、どの程度までの否定的側面を妥当な対人関係の要素として認めるかについて、研究対象の対人関係のパートナー、社会、研究者のそれぞれの倫理観のせめぎあいの検討から始める必要がある。この検討のためには、まず否定的側面を研究の俎上に載せるため、否定的側面が親しい関係の構成要素となり得るように理論的枠組みを拡大することが必要なのである。換言すると、ここでいう否定的側面の容認とは、否定的側面の無条件な肯定ではなく、それを「普通」の対人関係の概念を拡張するための検討資料として受け入れるということである。それがなければ、研究者自身が己の価値観や所属する文化の価値観を見極めながら理論を発展することは困難である。

結語：「修復」の研究は必要か？

以上のように、対人関係の「修復」という概念は非常に多岐に互る分野を総合するが故に、研究対象として非常に困難であるといえる。現実的に考えれば、実際に研究を行う際には何の「修復」を扱うのか明確に限定しなければ研究にならない。それは例えば、対人関係の「維持」、「認知変化による赦し」、「上手な関係解消」という個別の分野に関する研究である。現時点の状況では、そのような形で実際のデータを増やすことが賢明であると言える。

それでは、敢えて「修復」という概念を必要とする理由は何であろうか。それは、個々の分野の研究を総合するためのメタ理論的概念としての存在意義である。総合ということは諸現象を一括して説明する試みではなく、とかくばらばらに評価されがちな個々のデータを他の研究と関連付けることにより、新しい研究や理論の発展を生み出す試みである。例えばHarvey(1998)は、「喪失」をキーワードとして、慢性病、スポーツ選手の引退、家族の死、恋人への幻滅、ホロコースト、差別などの様々な現象を総合し、それぞれの現象について「喪失体験の社会的な意味とは何か」という問題を提起することに成功している(Neimeyer, 1998)。社会的な価値について研究者の興味を喚起するのは、「対象喪失」がある特定の部分だけで済まないからである。ある対象を喪失することは他の対象の喪失を必ず引き起こすため、「病気」や「死」などの特定の喪失体験を注目するだけでは、現実にと向き合っている人たちの力になることはできないのである。

つまり、逆説的ではあるが、総合的な抽象的な概念を念頭に置くことによって、研究者は目配りの利いた、より現実的な取り組むができるようになるのである。Acitelli & Duck(1987)が指摘するように、個々の研究者が出来ることは、曖昧な対象の一部の解明に過ぎない。しかし重要なことは、その一部に留まるのではなく、他の研究者が解明した別の部分と総合すること

で、対象の全体像を想像することである。「修復」という概念は、社会的価値そのものであり、その言葉を用いることによって始めて対象として捉えられる社会的構成物である。社会的構成物を研究対象にするということは、これを口にするだけで研究者が自身と研究対象の立場を明らかにするということでもある(Gergen, 1994)。互いの立場を明確にすることから、研究者同士の交流が深まり、知識の更なる発展が可能になるのである。現時点における「修復」という概念の有用性は、今後の学際的な対人関係研究の発展を生み出す触媒としての機能にある。

引用文献

- Acitelli, L. K. & Duck, S. W. (1987). Postscript: Intimacy as the proverbial elephant. In D. Perlman & S. W. Duck (Eds.), *Intimate relationships: Development, dynamics, and deterioration*, (pp. 297-308). Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Ahrons, C. R. (1994). *The good divorce: Keeping your family together when your marriage comes apart*. New York: HarperCollins.
- Ahrons, C. R., & Wallisch, L. S. (1987). The relationship between former spouses. In D. Perlman & S. W. Duck (Eds.), *Intimate relationships: Development, dynamics, and deterioration*, (pp. 269-296). Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Ambert, A.-M. (1988). Relationship between ex-spouses: individual and dyadic perspectives. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 327-346.
- Ambert, A.-M. (1989). *Ex-spouses and new spouses: A study of relationships*. Greenwich, CT: JAI Press.
- Attridge, M. (1994). Barriers to dissolution of romantic relationships. In D.J. Canary & L. Stafford (Eds.), *Communication and relational maintenance*, (pp. 141-164). San Diego: Academic Press.
- Banks, S. P., Altendorf, D. M., Greene, J. O., & Cody, M. J. (1987). An examination of relationship disengagement: Perceptions, breakup strategies and outcomes. *Western Journal of Speech Communication*, 51, 19-41.
- Battaglia, D.M., Richard, F.D., Datteri, D.L. & Lord, C.G. (1998). Breaking up is (relatively) easy to do: A script for the dissolution of close relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15, 829-845.
- Baxter, L. A. (1984). Trajectories of relationship disengagement. *Journal of Social and Personal Relationships*, 1, 29-48.
- Baxter, L. A., & Bullis, C. (1986). Turning points in developing romantic relationships. *Human Communication Research*, 12, 469-493.
- Baxter, L. A., & Montgomery, B. M. (1996). *Relating: Dialogues & dialectics*. New York: The Guilford Press.
- Berman, W. H. (1985). Continued attachment after legal divorce. *Journal of Family Issues*, 6, 375-392.
- Berman, W. H. (1988a). The relationship of ex-spouse attachment to adjustment following divorce. *Journal of Family Psychology*, 1, 312-328.
- Berman, W. H. (1988b). The role of attachment in the post-divorce experience. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 496-503.
- Burgess, R.L., & Huston, T.L. (Eds.). (1979). *Social exchange in developing relationships*. New York: Academic Press.
- Cahn, D. D. (1992). *Conflict in intimate relationships*. New York: The Guilford Press.
- Cahn, D. D. & Lloyd, S. A. (Eds.) (1996). *Family violence from a communication perspective*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Canary, D. J., Cupach, W.R., & Messman, S.J. (1995). *Relationship conflict: Conflict in parent-child, friendship, and romantic relationships*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Canary, D. J. & Cupuch, W. R. (1988). Relational and episodic characteristic associated with conflict tactics. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 305-325.
- Canary, D. J., & Spitzberg, B. H. (1987). Appropriateness and effectiveness perceptions of conflict strategies. *Human Communication Research*, 14, 93-118.
- Canary, D. J. & Spitzberg, B. H. (1989). A model of the perceived competence of conflict strategies. *Human*

- Communication Research*, **15**, 630-649.
- Canary, D. J. & Stafford, L (Eds.) (1994). *Communication and relational maintenance*. San Diego: Academic Press.
- Cloven, D.H., & Roloff, M.E. (1991). Sense-making activities and interpersonal conflict: Communicative cures for the mulling blues. *Western Journal of Speech Communication*, **55**, 134-158.
- Conville, R. L. (1988). Relational transitions: An inquiry into their structure and function. *Journal of Social and Personal Relationships*, **5**, 423-437.
- Conville, R. L. (1991). *Relational transitions: The evolution of personal relationships*. New York: Praeger.
- Dindia, K. & Canary, D. J. (Eds.) (1993). Special issue on relational maintenance. *Journal of Social and Personal Relationships*, **10** (2).
- Duck, S. W. (1982). A topography of relationship disengagement and dissolution. In S. W. Duck (Ed.), *Personal relationships: Vol. 4. Dissolving personal relationships*, (pp.). London: Academic Press.
- Duck, S. W. (Ed.) (1984a). *Personal relationships: Vol. 5. Repairing personal relationships*. London: Academic Press.
- Duck, S. W. (1984b). A perspective on the repair of personal relationships: Repair of what, when? In S. W. Duck (Ed.), *Personal relationships: Vol. 5. Repairing personal relationships*, (pp. 163-184). London: Academic Press.
- Duck, S. W. (1988). *Relating to others*. Milton Keynes: Open University Press.
- Duck, S. W. (1994). *Meaningful relationships: Talking, sense, and relating*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Duck, S. W. (2000, December 6th). Personal communication.
- Erbert, L. A., & Duck, S. W. (1997). Rethinking satisfaction in personal relationships from a dialectical perspective. In R. J. Sternberg & M. Hojjat (Eds.), *Satisfaction in close relationships*, (pp. 190-216). New York: The Guilford Press.
- Foley, L., & Fraser, J. (1998). A research note on post-dating relationships: The social embeddedness of redefining romantic coupling. *Sociological Perspectives*, **41**, 209-219.
- Ganong, L. H., & Coleman, M. (1994). *Remarried family relationships*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Gergen, K. J. (1994). *Realities and relationships: Sounding in social construction*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Graham, E. E. (1997). Turning points and commitment in post-divorce relationships. *Communication Monographs*, **64**, 350-368.
- Harvey, J. H. (1995). *Odyssey of the heart: The search for closeness, intimacy and love*. New York: Freeman.
- Harvey, J. H. (Ed.) (1998). *Perspectives on loss: A sourcebook*. Philadelphia, PA: Brunner/Mazel.
- Harvey, J. H. & Wenzel, A. (Eds.) (2001). *A clinician's guide to maintaining and enhancing close relationships*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Huston, T. L., Surra, C., A., Fitzgerald, N. M., & Cate, R. M. (1981). From courtship to marriage: Mate selection as an interpersonal process. In S. W. Duck & R. Gilmour (Eds.), *Personal relationships: Vol. 2. Developing personal relationships*, (pp. 53-88). London: Academic Press
- Johnson, M. P. (1982). Social and cognitive features of the dissolution of commitment to relationships. In S. W. Duck (Ed.), *Personal relationships: Vol. 4. Dissolving personal relationships*, (pp. 51-73). London: Academic Press.
- Lee, J. A. (1973). *Colors of love*. Toronto: New Press.
- Lussier, Y., & Alain, M. (1986). Attribution et vécu émotionnel post-divorce. *Canadian Journal of Behavioral Science*, **18**, 248-256.
- MacLennan, J. (1998, November). *Part of the question and part of the answer: Relationship redefinition after the breakup*. Paper presented at the National Communication Association the 84th Annual Convention, New York.
- Masheter, C. (1991). Postdivorce relationships between ex-spouses: The roles of attachment and interpersonal conflict. *Journal of Marriage and the Family*, **53**, 103-110.
- Masheter, C. (1997). Healthy and unhealthy Friendship and hostility between ex-spouses. *Journal of Marriage and the Family*, **59**, 463-475.

- Masuda, M. (2000/in-press). Accounting for post-dissolution relationships. *Dissertation Abstract International*.
- McCullough, M., Pargament, K. I., & Thoresen, C. E. (Eds.). (2000). *Forgiveness: Theory, research, and practice*. New York: The Guilford Press.
- McCullough, M. E., Rachel, K. C., Sandage, S. J., Worthington, E. L., Brown, S. W., & Hight, T. L. (1988). Interpersonal forgiving in close relationships: II. Theoretical elaboration and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1586-1603.
- Metts, S., Cupach, W., & Bejlovec, R. A. (1989). "I love you too much to ever start liking you": Redefining romantic relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **6**, 259-274.
- Milardo, R. M. (1987). Changes in social networks of women and men following divorce: A review. *Journal of Family Issues*, **8**, 78-96.
- Neimeyer, R. A. (1998). Can there be a psychology of loss? In J. H. Harvey (Ed.). *Perspectives on loss: A sourcebook*, (pp. 331-341). Philadelphia, PA: Brunner/Mazel.
- Notarius, C. I. & Pellegrini, D. S. (1984). Marital processes as stressors and stress mediators: Implications for marital repair. In S. W. Duck (Ed.), *Personal relationships: Vol. 5. Repairing personal relationships*, (pp. 67-88). London: Academic Press.
- Rubin, Z. (1970). Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.
- Schneider, C. S. & Kenny, D. A. (2000). Cross-sex friends who were once romantic partners: Are they platonic friends now? *Journal of Social and Personal Relationships*, **17**, 451-466.
- Sternberg, R. J. (1986). A triangular theory of love. *Psychological Review*, **93**, 119-135.
- Werking, K. J. (1997). *We're just good friends: Women and men in non-romantic relationships*. New York: The Guilford Press.
- Wilmot, W. W., Carbaugh, D. A., & Baxter, L. A. (1985). Communicative strategies used to terminate romantic relationships. *Western Journal of Speech Communication*, **49**, 204-216.
- Wiseman, J. P. & Duck, S. W. (1995). Having and managing enemies: A very challenging relationship. In S. W. Duck & J. T. Wood (Eds.), *Confronting relationship challenges* (pp. 43-72). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

Do relationship scholars need such a concept as “repair”? - A review-

Masahiro MASUDA (*Department of Language and Communication Faculty of Human and Social Environment, Hiroshima International University*)

This review article discusses whether or not the adoption of the term “repair” contributes to the development of personal relationship research, in which “repair” is associated with various relational interactions as well as individual social behaviors, including relational maintenance, relational redefinition, dissolution, and coping behaviors. Such diversity in definitions of “repair” represents multiple values in researchers’ societies; and therefore, the term “repair” is expected to clarify each scholar’s theoretical view of an “ideal” personal relationship, that is, how a personal relationship should be. Thus, although it is very difficult to construct an overarching theory of “repair,” this term has a potential meta-theoretical function which integrates research findings in one research area with those in another.

Keywords : repair of relationship, relational maintenance, dissolution of relationship, relational redefinition, coping behaviors